





附合大意

凡佛諧の連哥といふるハ和歌乃世一字減二句五分とす
哥とも佛諧ともあやう前句は附くとして佛諧の連哥
といふ能附くとし字意なりといふこと前句の字又ハ後
款といふするふれ附ては離れをふれてハ附事主とあり
客とあり變化^{ヘシ}窮^{クハキハニ}まゝくあるべきよしとす此あり
似合さるん句は落題のみと一前句は預けり歌に見
たりて附句乃作意は終り立のまな様は止へ己う一句
立の盡きハみ解いと云解めて終ハ根あり物乃波は漂ふ

如く辨して我う志したる中意なると也兎角前句と一保
ふ心は又新しき紙か句といふ他處より芭蕉の発句は
上多といつる翁の曰発句ハ予に勝る人多かるべし俳
諧は予う上へ越え人ハ多しと常々自負いたされし也
今時世同くは附くぬよりとてやうのを知りて前句は
等閑に見ゆ一をとおさうく理屈は作つとせうと極
やして百韻奇仙等あてもられ云ひ並へて居斗あそ
る内ふりとの按き指しても教てかゝるも蕉門の附
方ハ階級を調練して附け給へるは髪と不入一字一句も

執一かゝるやあれハ又蕉門ハ新法なりといふもほと
翁の名けて曰推量傳系氣のこゝとは論一とある
けしひもとの此論は或ハ前句乃摸模は傳るるや也
む師説多しといふも此も亦ハ三姉の附あり
極まり呂自カみて附く時は是非理屈はさるべし
前句と能く味みて方ぬへつて予も案されハ自の附
ありこれこゝ乃其の他カ自他より出たふありと
知るべし一回一紙あふ前句といへも上五又字少しの意
ひいて附味乃おまゐるるや何り冠りにかゝる例引句

剪

杉志ける淋^ニむくハか^ニし^ニ記

猿蓑

附

何人連く急く松人

剪

松一本淋^ニむくハか^ニし^ニ記

淋^ニす^ニす

附

子と呼猿乃声んは^ニさ^ニなり

剪

岩^ニる^ニ一^ニ淋^ニむくハか^ニし^ニ記

閑なる所

附

柴乃戸深く法華經を讀む

ぬれ^ニれ^ニく^ニ前^ニの^ニ情^ニを^ニた^ニと^ニ考^ニへ^ニ附^ニと^ニふ^ニさ^ニなり

譬ハ詩賦乃格調多しと^ニり^ニも^ニあ^ニれ^ニと^ニさ^ニめ^ニる^ニの^ニハ

風雅頌の^ニこ^ニつ^ニたり^ニ神裁^ニも^ニ吹^ニあ^ニと^ニり^ニも^ニ意^ニ匠^ニ

乃出^ニふ^ニ所^ニは^ニ財^ニ比^ニ真^ニより^ニ記^ニき^ニり^ニ佛^ニ語^ニの^ニ附^ニ力^ニを^ニ

むろり^ニく^ニ真^ニ象^ニは^ニあ^ニり^ニの^ニ術^ニあり^ニ祭^ニ句^ニは^ニ裁^ニき^ニ

多^ニ事^ニとな^ニす^ニの^ニ大^ニ業^ニあり^ニも^ニあ^ニり^ニ附^ニ合^ニは^ニ三^ニ有^ニ

乃^ニ反^ニな^ニと^ニ一^ニ祭^ニ句^ニは^ニふ^ニれ^ニの^ニ具^ニと^ニ箱^ニ乃^ニ示^ニ一^ニ又^ニ

ア^ニと^ニり^ニく^ニ附^ニ合^ニは^ニさ^ニ面^ニう^ニ句^ニ添^ニり^ニ二^ニの^ニめ^ニと^ニく^ニ之^ニ乃^ニ

か^ニこ^ニも^ニあ^ニり^ニと^ニあ^ニめ^ニへ^ニ一^ニ右^ニに^ニあ^ニり^ニと^ニ乃^ニと^ニ

ハ^ニ我^ニの^ニ秘^ニと^ニり^ニあ^ニと^ニり^ニも^ニ舊^ニ風^ニ流^ニ布^ニ乃^ニあ^ニる^ニ

先^ニ事^ニ未^ニ題^ニの^ニ説^ニと^ニあ^ニり^ニも^ニ一^ニ也^ニ猿^ニ猿^ニの^ニ

佛^ニ語^ニと^ニれ^ニれ^ニ摘^ニん^ニて^ニこ^ニも^ニと^ニ詳^ニし^ニす^ニ句^ニ作^ニり^ニ

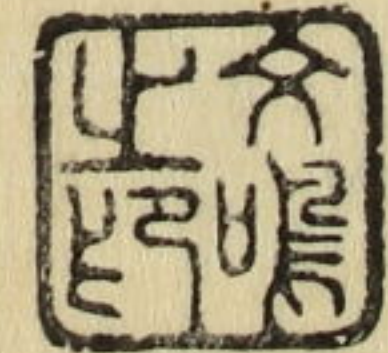
乃^ク事^ジハ口^グ受^グニ述^グル

猿談下

三

心風芭蕉道統五世

皇都 新茶房文鳴著



前^マの
まゝ
いゝ戸^{カド}は昔^カ遠^ハか家^イ宵^ヨの月

いふ^イふ^フは^ハ程^ハと^トす^ス條^ハ終^ハ乃^ハう^ハ夜^ハ去^ハけ^ハ一^ハ場^ハを
此^コ山^ノと^トさ^ス荒^ハ地^ハに^ニ隣^ハり^テ昔^カ生^ハひ^ハあ^ハけ^ハま^ハい^ハつ^ハ戸^ハ
に^ニ地^チ錦^{キン}這^ハい^ハく^ハふ^ハて^テ人^{ヒト}跡^{アト}乃^ハ希^ハを^ハあ^ハけ^ハと^ト錦^{キン}
情^{ナリ}に^ニ又^{マタ}て^テ宵^ヨ月^{ツキ}此^コ親^ハと^トは^ハ今^{イマ}遠^ハい^ハく^ハあ^ハり
親^ハは^ハ師^ハと^ト云^ハふ^ハす^ハて^テ又^{マタ}い^ハく^ハあ^ハり^ハけ^ハぬ^ハ他^ハい^ハ住^ハ居^ハ
推^{オシ}量^{リヤウ}附^{ツキ}たり

人^{ヒト}も^モく^ハれ^ハす^ハ名^ナ物^{モノ}乃^ハ梨^ハ

栗^{トシ}栖^ハぬ^ハ何^{ナニ}果^ハ柑^ハ子^ハの^ハ樹^ハと^ト植^ハゝ^ハ類^ハい^ハ庭^ハの^ハさ^ハひ^ハに
あ^ハつ^ハて^テ菓^ハ木^ハれ^ハる^ハあ^ハり^ハハ^ハ何^{ナニ}の^ハ名^ナ拙^ハく^ハ思^ハひ^ハれ^ハと

風化乃勺かんふ風雅と無く富侍つけをり

かゝるあくる里宇路わうく妹さうく

葉乃まゝ庭より足くく座敷の襖戸をあき
けあもたも縁廊乃争うまゝせしかたなく
嗟うとてみせ文字の月にてあを動いてわう
く秋さきてと系氣へ運いて秋の縁額と勺目の働
き伸まう云ん

あふ
苔あゝ花よ並あゝも水神

けあ勺のさゝ木つさゝは月の縁夜と勺をえは
程樹郭橐駝も趣もまける植木とさよて胸中乃

風雅無りかと月乃勝夜とはまひうけうり
庭あゝは苔むゝ新まゝくくあゝ花ハ更あり
も風景は後の感りは系氣の附方うけ

あふ
ひゝりあゝも新乃腹うり

苔さうく花よ並あゝと市中の隠途とまじ
独身乃付付と人情の常とて老と交うれは
耳はよけれとあとのうれんやまゝ解く小後の
まのわりや我もまゝさなまふれと古語をんと
嘯きてひゝりといふも散一ほを一日の用とあ

あふ
いちとさへ二日乃物も喰てあ

前句の段々をけなハ任使ジケラのやうと付付り
任使ハ唐土乃男達乃名ありいちとれ二乃お
も冷て云乃字にんと付く尺ある一福
身の善は時々電の下紙くをぬくとも小むくく
そ造作の整もすく又ハ下の方にも音信て裡け
ふとの保しも付りや彩母き豪傑乃振舞者
金百斤とゆんより李布一諾ダクとゆんはや
とゆいもば人乃事や万事吾のむ胸に
あんと有りて益乃大合はは有り

雪

けよさむさる此北風

わづけの山陰万ふ自由なは此北風が所にて

ハ必勇若も生あるやう一雪けの風人乃
肌骨キコツは硬イシハりま一と推量

火

とこ一に雪れハ登海峯れち

系氣附あり峨ガとく岩根者も雪を夢ひぬ
と尻もけ一れハ住居まきともあはれ雪れハ簾の
ゆより勤ふは灯は後海船の目あはん

ほ

とこ一に雪れハ登海峯れち

前句の雪のまじりハ山時々の能き交場や付
らん雪のまもゆき更けて雪はまじりと推
量附り一と轉て妙あり

瘦骨^{マシ}れすこ起あつ力たすこ

まは風流に整つる人の病は即ちけきの花は
兄とつてもありれ時々はまむいよとよのまを
こもふくまの瘦骨れいすこ病をとてあれす
保養の只中益氣建中の湯あつんと醫藥入
入れて付附く

剪^カ落^カ乃^カ芽とり^カに^カ以^カ燈^カゆり^カす

前うの場は田畠れ離辺の趣とすこく^カ業^カ取^カと蛙
こはうハおす乃女子のふまひかろ希人^カ乃^カ養^カ應^カ
よも^カ燈^カ花^カのおさふ月由に落乃芽さうより燈花

はるいれ茅舎のありふる系氣附く

附
道心のねろりハむれつかむ時

いおられり燈ゆり消をこくまき系とより実も人ろ
の生涯は風おれ燈と看破して今乃の系氣附
よはる乃のねろりハ火室乃門とまふさう
めと花の答む時^{ツボ}は初一念信心の法やとと折を
時氣きて終まは妙えれむと問答^カ一又の解^カは
花は海系よを轉變と觀一悟入^カまはハのつ
ねこむのつやとて速まなむの付と思惟^カ一
ふおこすこ殊勝といふむの散る時とほふと
とつやむ時ハ全神の俳諧これと伸とりかた

はやも終はるるなりとありき申しと平白
 奏白もいれりしをいふの白は門は入れぬ蘭は蘇
 鉄の白ひやくふ白或人まゝと匠と知れりしを
 蘊奥とけふの凡情と辨へりて何處集の中
 に門は入れとて門は葉のひかりとて入集
 したる如きふと思ふ葉は白くお蔭鉄は白
 く白ひたりとて理窟とて人佛偈は白く葉はと
 て門の白ひたりとて凡情も魂もあつたりなり已
 解とあやふ人もすすしとて進と惑りすの
 う蕉門の仇と古老よりとりとて血脈にあらは
 たる蕉門の白きあんとて理窟乃自らはあ
 るや

前の
 いのち

前句は草庵は暫く是へちやうとて白なり所
 謂此草庵のまは悦は塵俗としつれま如の月と
 まゆー花んとしむとて人のあふともいひけと
 人まうれしとて引とて結ひ一葉の庵もえの野
 系とちやう一取ふ位や水のあとえけれハ花を
 乃意まとも思ひあふたりとてのみえとてね葉
 の度むすぬとて中一をうりやはちあん珠結と
 まよきとていふ境界は只なりとて結因西の徒
 あらん前句の付西のまよ心いふと彼は作
 一とてのつもの方といふとてうりや都は撰集

ありとオキ田よりぬきられといふおも
と旅ヨソヲ催ひして途中トまでも出られしを越え向ふ
よこよりオキしゆりて推量附

附

さまゝに品々を運んで

る面はそれとあつて底衣には西のり衣と
 泥りより附方三寸の輪廻と云れ轉テりより彼上人
 のむり則はとひり時きありありて忍ひ妻は別
 れより心と弁シと和奇は言シなりと
 風情と常として風呂敷包と巻と強く風塵と
 来作ヨウハク一芙蓉の煙より雨もきぬ思ひを觀カミ
 清みより柳新コシヨクは五濁と云れ又或時は

月の唐紙に漂い小舟に篠原をめぐりて八雲のやうの
志きふともなりけり花の春はふれ初瀬の雲ともん
そひとあうそきとけりそぬこれハさめくはあまうり
とふ恋もとんとけり下ろ恋とふあまうり男女
乃愛恋のこゝかうに定象々の焼やりのあもこ
うれしと縁のあまうりの君をとりとや

浮世乃果之皆小町なり

小町う事ささうあゝぬくつれと誓く古人の呪ふ倅
けうとせ乃果とてふは玄量の快情と鑑り前白
の志慕愛執と述懐の志さうけし小町う生涯乃始
終やは干うぬくの夢り果てはさるもくもせの中一の

盛若必衰のやうに張九齡の宿昔青雲志蹉跎
白髮年々作やうは鏡と照して自老を驚くの意嗟
夫草木の情なきも時つて飄零を況人なるる
果は皆小町と思ひより付附は白ひ添へ

前
ものおりひりか忘めて休む日は

前句ハ蛭のりきとてま味とてとわき
は茶枕杯の逗るとり旅つれは奇なりハ休
とりと忘る思ひと休む時して世を附

附一
定せりきなりのあ

寵愛深き奴女ゆやの類ひ皆一のやうとけり里下り

して四前はより乃操の弓弦とてうーうー寐の夢
あーにけきとてうーうーやうやう
君より臣のさあれやい色は宗室公よりゆへ
て以彼をまよふへ一隊尾のやうなりけりや
ま場の付附かん

三
金鐸と人よりなるものやすさ

殿の以領かゝ何某とて白人の老を門接へ今誰を
以入のこゝに用より息うて結構作りの腰のおと
めすゆつくり老を付今目前はんあやう一をより
ふはほりて金鐸とて名のきりるゝ何るみんて金
乃さうハ此こちとてより他よりあやう一ははる目

一のむとふるゝ古翁別僧と云前をど加へ格別の
風情と云せり也して附合ハ外なるをさう
て動く心と云ふといふもさうては附味ハ別腹の
ありけり也と云ふれとのけて外なるあはれさや水月
鏡花の妙境と云ふ今擬して云ハ膳所の口端を徒
に城ありといふは前よりけりけりけりけりけり
るあて何の妙やまゝか哉の社は翁のあやかく百夜
千夜りてても実なるは社と云ふいふも腹山への眼力
あはれなり一袖ハ附の付と云ふさひさうん白面ハ景氣
之候ハ附味のもて付推量と云ふ三折の巻紙をさうて
お

二
お

うりれ尻都メさく名を承すて

森と云ふ一社森町のおうり声ハききし乃藤乃
喜の心也と云ふん係氏字原のまゝさうん大木の恵ひ
夜のころけひ夜もりのくとけりハ藤乃おんれ
と云声のあつておとと云いこゝと云てお作り
と云林と云ふてりけり林と云ふ氣附おんれ

前

棚は火のりす大年の夜

前ハ小力の鈴あたりおんれと云ふさうと云
後ふつて市中のけりさうと云ふ氣付く

附

こゝとハねり使も次子の浦

さういひのあつてさうなると云ふや著ぬれと云

いませのふすりえり」と年華のうつりめを言ふをた乃
 光のきさうくうふたぬみそとくうといふ付附の
 とくりえん

ちゝの解は窓下乃ほもく眠るなりも尤も短く古賢と云
是は先哲乃白雲庵よりして後之深谷阿りなりして又
はるあらん後のなる人いさゝもいと拾ひあゝと拾ふ人

歌仙

花洛連中

八重きしりや極くけ此料理さ
 日和乃落る蟬のむく
 浅井て浅井刀もまうけく
 風乃揃くまふたやりさあり
 李く揃く氣^り跡^{トウ}出くあり月きぬ
 き勢ふ通くふせや白^{カヤ}茅くふはく
 流きあふ言実の先へ落く
 中ない君く日^アもあ^アかふ
 荷くきくきく在く在く
 富雪

あはれ	て	衣に	深中	乃	筆	松	下
あ	面	ま	は	い	男	め	と
娘	う	讓	う	鑑	乃	た	ま
幻	乃	幾	い	も	る	酒	き
紅	う	流	を	月	乃	疎	一
う	い	ら	ま	と	石	燈	を
七	十	五	口	河	は	も	ま
鈴	り	糸	の	や	く	碎	う
お	ハ	一	面	う	ま	乃	う
							角
							經
							明
							山
							龜
							上
							及
							声
							石
							晚
							来
							紅
							水
							奇
							編
							柳
							吟
							松
							下

雪	う	は	う	う	登	う	お	才	子	り	文	雄
高	う	賣	ふ	う	う	懐	ふ	衣	を	屋	詩	夕
宵	の	う	隅	一	笑	い	乃	給	仕	人	殊	春
恨	ち	う	一	乃	折	う	う	層	を	李	從	
綿	字	と	音	の	あ	ま	火	乃	人	さ	文	和
隅	く	形	の	通	ふ	釋	や	う	湖	雪		
木	を	伐	う	投	む	民	ま	乃	掛	り	合	素
神	名	苑	所	を	照	う	乃	名	月	葉	曲	
冷	風	う	外	ま	何	や	う	人	通	り	游	吟

ことゝけ 張ひのらん月あふれ
 言せしと居しと胸も沁み
 福乃 夢ひ 夢ハ 夢ゝ 夢に 夢を
 弦打 — 車 張 る ヌ 〽 秘言^{コハツリ}
 えゝゝ ぬ 匂ひゝ 落 ぬ り せ
 糸 相 成 造 出 し 〽 掬 け 糸 り
 中 戸 の 意 成 眠 く 夢 風
 花 ち り 〽 塵 ち り 玉 乃 水 盆
 海 生 ハ 糸 人の 夢 〽 糸 かい 糸
 紫 好
 文 雄
 文 明
 桃 牛
 文 正
 花 友
 巴 流
 翠 栢
 執 筆

赤いふく大根皮く新田川
 戴き連して通る 橘 紫
 唐けくふ少るお店乃古埃り
 何う見つきて居あひも
 鼻かゝる煙ハ月の痛を知り
 婦よりこつアツ聖に新顔
 之旁く雲の影の映し奥に
 新田の客くぬき袋解く
 其むうーろろろくもきこみ後
 下 初 春 和 仙 了 和 初 春

無縁系くぬさくぬけを
 大野の影の上の白く月
 ハる ハ可きあゝく
 筆 友 初

歌仙

越後白根

田連中

物々ーねく新田の神時
 志ふろ里々川乃きく夕月
 亭へ来る賢人を乃新吹く
 作 了

秘蔵の琴と余所とを引たる	多仙
あしき二かきと却るる如	文和
移乃移まへ上へのうけり	臥寄
雪の鳴きしきと雪の如	文家
小窓をゆけて傾く勢	市子
おー乃窓披く響きの思時	可留
飛脚と君と響きけり之	吉柳
月とよふ花並風と月園子	将友
葉とく出く境とくを浦	先乙

滑り揺りかしと秋と雪	布衣
うさきの顔の面乃雪も消く	春菜
あせより夫婦て仕ぬるは園庭	真白
くさくさきさへ何あつりさ	る
あさちと雪のふれ居る	和
ありさしと雪のふれ	是約
春風と雪と雪のふれ	臥寄
新と雪と雪のふれ	和
花と雪のふれ	る

照りや朝日の匂ふ梅 京上吉川 水ゑふ 雪知

いづはうり 廣野 末乃 秋の音 庄内新岡 風狂

花雪のおくりや月乃 朝や 仙臺大蔵院 艸秋

ハ葉と世のうね 花や 秋乃 音 越前根 弁三

十園子乃 小粒と 泣き声 桑葉 同 文和

世の中ハ下も上も 秋の風 同 遠物

雪うとく 五と 此 蝶乃 葉の舞 同 冬仙

菊花乃 湖の 同 けしき 月夜 仙臺見守 先二

る 諸ふ 指も ぬき 入 月夜 くれ 仙臺見守 雪ふ

あて ちと 五柳乃 骨の 朝 傳中舎委 曾子

月影や 今一 巻の ぬき 石 同 亀上

廣う 庭ハ 庭乃 雪や 梅乃 雪 同 桃半

四季乃 白や 雪れ 葉む 秋の 蝶 同 秋雪

いと ちひや 忘れ みの 唇の 夢 同 文雄

白州と 連き 足さ 秋の 風 越前根 雪石

月乃 木や 雪う 仔細の くれ 雪 麦 越前根 素後

雪と ちと 雪れ ちと 雪れ 雪や 虫の 夢 越前根 布衣

砂粒も 雪は 良し 續いて 雪 根外 越前根 湖の

仙臺廣瀨

りといふ名あり一りいふ名あり

まが小都ひありいふ名あり

江ノ口へ免るなり月乃照

世に写す月のと砂や糞上より

れぬへふいふ名あり

精をのぬやまのり虫の草種五葉

五十と踏す一葉なり新なり

招れ乃き付すえい川の山

志の山名あり月乃のうほり

戸京

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

あゝ川のぬきや月の中れ月 虎臺

下略

甲申乃仲秋ハ五老井五十五

一り芭蕉翁曰詩ハとらへ師と風雅ハ

教へく身とふれとふれとふれとふれ

とわくい神の法を布くふあり

懐旧歌仙 越白根連中

文鳴お

おとねや経てハ原とふる月夜新

おむすの夢のりく片を地	う
灯籠に輝く名字あり	竹友
け方乃ありてありふさる酔	茶
出世もは経貪みてわくら	う
う鉄炮をかきふ目通り	去柳
おふうはけしとひつさけ	笛
あふうふとろける宮日	う
沈みろくは法橋に月	物

秋を来よりうの味ひ	和
習入―夢を夢人ともなして	友
二條通うも風をとちやうせ	高
む―思くもほろひるやうのと	物
ま味やう夢で初めの程	茶
うふ馬ふふふも花のぬれ	冬仙
昔夢はさけき山葵もあつた	年

同奇仙

仙春度満連中

毛の^し見まゝ新乃^し勝も早——
 青乃^し糸^し此^し仲^し人^しあそ^し 文
 人^しも^し望^しい^しあ^しあ^し 文
 笑^しう^して^しけ^して^しも^し一^し首^し望^しま^しふ
 雨^し降^しい^しぬ^しう^しき^しう^し向^しい^し山
 う^しま^しあ^しね^しう^し蛇^しの^しあ^しの^しけ^しり
 後^し秋^しう^しあ^しれ^しぬ^しま^しと^しき^しう^しけ^し
 女^し房^しあ^しう^しけ^しを^し持^して^しけ^しん^し
 甚^し弱^しも^しう^しに^した^しう^しい^しう^し妻^しの^しき^し

全 人 全 里 人 里 人 全 人 全

う^しあ^しう^しま^しの^しあ^し乃^し既^しも^し夕^し秋
 忘^しふ^しう^しう^し極^しそ^しう^し情^し知^しう^し
 髪^し切^しつ^して^し後^しう^し結^しき^し——
 傾^しき^しと^し大^し工^し乃^し更^しす^しこ^しの^し月
 う^しう^しま^しと^しあ^しう^しと^しい^しう^し草^しの^しあ^し
 竹^し下^し結^しう^し仕^し掛^しう^し後^しう^しの^し葉^し
 肉^し華^し清^しう^しは^しあ^しれ^しと^し果^し——^しな
 思^しい^しか^し——^し花^しの^しあ^しち^しと^し地^しを^し付^して
 あ^しい^し時^しに^しう^しお^し活^しも^し自^しう^しぬ

里 全 人 全 里 全 人 全 人 全

長頭丸負徒の俳諧の自異^ニとして其^ヲ仰^リふ其^ノ季^ノ分^ノを
 小傳て世と評し吟翁又我^ノ翁^ノ後受て俳^ノ作^ノも大^ニおろし後又
 伊^ノ友^ノの云ふ^ニも自^ノ異^ニは奥^ノ家^ノへ全^ク世^ノ蕉^ノ翁^ノに倣^フふ其^ノ中^ニ
 号^セや二^ノれ巻^ヲつて蕉^ノ門^ノ代^ノの腕^ノの求^メて^ニ公^ノ翁^ノより金^ノ母^ノの如^ク
 二^ノは^ニ翁^ノと他^ノ家^ノより遠^ニ杯^ノと^ニ蕉^ノ門^ノの味^ヲと^ニあ^ニま^ニ軍^ノあ^ニん
 一^ノ番^ノハ歷^ノ代^ノ滑稽^ノ傳^ノより^ニつ^ニて時^ノ安^ノ曆^ノ三^ノ年^ノ申^ノ霜^ノ月^ノ十^ノ日^ノのま^ニ
 徒^ノ翁^ノ百^ノと^ニれ^ニき^ニ忘^レ管^ノむ^ニわ^ニか^ニつ^ニき^ニ靈^ノ二^ノ捧^ニる^ニ吟

艸も亦予
 雪の百集乃
 作^ノ物
 文鳴拜

猿談義下 終

空^ノ采^ノ菴^ノ朝^ノ茶^ノ室^ノ
 好^ノ三^ノ舍^ノ山^ノ敬^ノ戸^ノ由^ノ友^ノ鳴^ノ

後序 蜀^ノ戸^ノ華^ノ

昔一武陵の人は漢リ一^ノち^ノ桃^ノ花^ノ乃^ノを
 或^ノ採^リて^ニ漢^ノふ^ニる^ニ其^ノ源^ノ以^テ家^ノむ^ニれ^ニて
 舍^ノり^ニす^ニは^ニる^ニ雞^ノ犬^ノ乃^ノを^ニも^ニ家^ノり^ニて^ニ必^ズ
 地^ノ一^ノ指^ニふ^ニ是^ノ尋^ノ常^ノ乃^ノ所^ノは^ニ何^ノに^ニ誰^ノ
 求^メて^ニ再^ニひ^ニけ^ニ絶^ノ境^ノは^ニむ^ニ人^ノや^ニ予^ノ久^ノく
 俳^ノ諧^ノ乃^ノを^ニふ^ニ竿^ノと^ニ振^ニ一^ノふ^ニ諸^ノの^ニ流^ノ成^ノ約^ノ
 い^ニ一^ノも^ニ荊^ノ棘^ノ乃^ノを^ニ漢^ノ一^ノを^ニ進^ノい^ニ其^ノの^ニ桃^ノ源^ノ入^ニ
 ら^ニふ^ニの^ニ思^ノい^ニ日^ノ後^ノ漢^ノふ^ニ其^ノの^ニ當^ノテ^ニす^ニく

好る舎乃主は芭蕉翁乃跡を踐く奥羽
乃細るゝ入世の人乃足付ぬ花
さうゝ望望のぬゝ乃ふ棠を泥ヒチリコり
高館乃其妙は兵さう其の依ゝゆめと
まゝのわ月ふと集うそは寂上川乃ちや
ぬふ苦吟の腸と泣く又其時は越路乃雪
ゝ雪成慕ひつり所敷道の切制り
やゆふゝて有俳乃乃古今と論ゝ法亦乃
然と解くと実ふ榮興乃器ちうふると案

一速ふりて門ゝ入るは露翁とゝ有俳諧
乃桃源別る地なるも吟翁又此はありあり
書り猿みのうゝと註ゝ古翁乃常ゝ
俳諧義とのゝ人例に倣い猿義と
題号ゝ是榮幸ふ江東乃許先師五十
通乃わゝり葉月おれん心法延ふ其
むと跋と予ふ名と予層渺ありて又
拙ゝゝゝ吟翁乃苦思と感ゝふさう
およりすすふ鳥馬以正ゝて跋を加へ梓ふ

上七同志、頌也、豈蕉門乃小補、乃人々

明和改元歲八月吉辰

都下

朝柳齋

殘露書



